

第39回学会大会開催にあたって

～“とっておき”の豊かな活動、生活、そして生き方を紡ぎだす

積極的なレジャー・レクリエーションの創造を求めて ～

日本レジャー・レクリエーション学会 (JSLRS)

会 長 鈴 木 秀 雄

関東学院大学教授、Ph. D.

この度、江戸川大学（所在地：千葉県流山市駒木）の御協力を得て、第39回学会大会を開催することとなりました。大会テーマを「生態系資源と文化的資源をつなぐライフデザイン」とし、先ず第1日目の地域研究では、旧葛飾郡エリアのレジャー・レクリエーション資源を探訪する。第2日目には、複数のセッションで、前述の大会テーマにみるデザイン、即ち、異なる資源の架け橋としてのレジャー・レクリエーションの視点から、「親水レクリエーション&スポーツから考える」（セッションA）、「世界の水辺空間&都市開発から考える」（セッションB）、さらに総括する観点から、ライフスタイルや地域資源を生かした“豊かさ実現”に向け「ひとりがリピーターを育み、リピーターが人を育てる ～着地型観光に学ぶ地域の誇り～」と題した総括セッションが企画されている。例年通り、学会員による活発な研究発表も第3日目に予定されており、会員の積極的な意見交換会（懇親会）も江戸川大学サテライトセンターで開催される。多くの会員の参加をお待ちします。

さて、先の政権交代により国の政治形態も大きな変わり目を迎え、これからますます我々の日常生活においても、多様な行動変容が求められてこよう。世界に目を転ずれば、まさに平和と環境がキーワード、これらは地球上に住む全ての人々が真剣にそして真摯に思いをめぐらさなければならぬ課題である。マクロな視点での平和と環境は、まさにミクロの人々の実生活のなかから生まれることに他ならない。それは、“とっておき”の豊かな活動、生活、そして生き方を紡ぎだす積極的なレジャー・レクリエーションの創造が求められることにも連動している。地域の生態系資源と文化的資源をつなぐデザインもまた、平和と環境に大きくかかわりを持つ。それらの架け橋の担い手としてのレジャー・レクリエーションを扱う学会の使命を再認識・再考しなければならないであろうことは論を待たない。

このような時代であるからこそ、レジャー・レクリエーションが個の単なる楽しさやおもしろさの追求や癒しに限定されることなく、むしろ広く塊のヒトとしての社会参加や社会貢献に資する“とっておき”の豊かな活動、生活、そして生き方の紡ぎ出しであることを一層啓発していかねばならない。リユース、リデュース、リサイクルの考え方も、物に対する扱いだけではなく、ヒトの心の扱いを訴えているのであって、敷衍すれば個人や社会に関する“物理的あるいは心理的時間”の扱いなどもまた熟考しなければならない必要不可欠な重要課題（Critical issue）であろう。

例えば、既に世界70か国以上で実施されている夏時間制度（Daylight saving time）の導入であるが、これは夏場の朝夕の日照時間が長い季節に一時間時計を進め有効に利用する制度だが、①省エネへの期待、温暖化防止などの地球環境の保全に役立つ効果、②明るいうちの通勤通学等により、特に薄暮時に多い交通事故や性犯罪の防止など安全な社会環境づくりに貢献、③ライフスタイルの変化により高い経済効果も予測され、④諸活動の活発化により健康な社会が作られるなどの利点がある。最も期待される積極的価値は、余暇活動の創造につながる日照時間帯を獲得することにより、家庭や地域での「豊かなゆとりある生活」を築くための精神的・時間的余裕を持つことである。これらの豊かな活動により余暇能力（Leisurability）が高まれば、夏時間の実施期間のみならず、年間を通して余暇への積極的な姿勢、態度、また意識が必ず生まれるはずである。新しい生活へのパラダイムの転換は、余暇能力の向上により、健康的で人間的な余裕を生みだし、豊かでゆとりある生活姿勢から、現代社会のトゲトゲしさを少しでも拭い去り、社会や周囲に対して思いやる優しい「心根」を持ち合わせる方向へと人々の生活を組み替えることにもなる。夏時間帯への移行は、工夫すれば、国内に存在する無限に近い数の時計を操作するのではなく、概念の導入により単に1時間早く日々の生活を始める形態にすれば「煩雑な時計の針の変更も不必要」となる。

“とっておき”の豊かな活動、生活、そして生き方の紡ぎ出しこそがレジャー・レクリエーションであることを理解すべきであり、学会もまたその概念普及に貢献すべきと強く感じている。 ■